

# タンポポサラダ

佐野 橙子

「母さん、何か食べたいものはありませんか」  
子ぎつねが聞きました。

「そうね……」  
母ぎつねは、少し考えていましたが、  
「そういえば、春のころに食べたタンポポサラダとかい  
うものは、おいしかったわね」  
と答えました。

「ああ、あれですか」

春の早いころのことでした。

きつねの子が原っぱのふちの林の中を歩いていたときで  
した。

林の中は、下草やかれ枝があって歩きにくいのです。そ  
れなのにどうして林の中を歩くかといいますと、明るい  
きに原っぱを歩くことを、母ぎつねからとめられているか  
らなのです。もしも、人間に見つかって、つかまえられる

ら……というのが、母ぎつねの心配なのです。子ぎつねは、  
母ぎつねの言いつけを守って、林の中を歩いていました。  
自分のすがたに日が当たらないような陰を選んで。林の中  
には、まだところどころに雪が残っていて、子ぎつねのほ  
ほに、ときどき、ひんやりとした風が吹きつけました。わ  
らびもここみも、まだ見えませんでした。  
ひんやりとした林とはちがって、原っぱのほうは、もう、  
一面の緑でした。ところどころに、タンポポの黄色い花も  
ありました。

「兄さん、あっちの方にたくさんあるわ」

子ぎつねは、びくっと首をすくめました。

人間の声でした。

「ああ、ほんとかだ。行ってみよう」

別の声もしました。

子ぎつねは、すくめていた首を、おそるおそるのぼして  
みました。原っぱのむこうから、男の子と、それより少し